

【原文と和訓】

《篆額》 抽齋涇江君墓碣銘

1 澁江道純墓碣銘

2 上總海保元備製文

備後小島知足書并篆額

3 嗚呼問其名則醫也問其攷古博涉之力則吾儒猶有愧焉是宜以尋常醫流目之乎以吾兀（所）親交唯

ああ其の名（うわべ、「名実」の名）を問へば則ち醫や、其の攷古、博涉の力を問へば則ち吾儒（私たち儒者）、猶ほ愧あり。これ宜しく尋常の醫流を以て之を目すべけんや。吾が親交する兀を以てすれば、唯だ

4 弘前澁江道純其似之矣道純少受學於市野迷庵迨長復役狩谷榊齋遊盖（蓋）近今之論古學者必推

弘前の澁江道純、其れ之に似たり。道純、少くして學を市野迷庵に受け、長ずるに迨び復た狩谷榊齋に従ひて遊ぶ。盖し近今の古學を論ずる者は、必ず二老（市野迷庵、狩谷榊齋）を推す。而して

5 二老而道純晨夕浸灌其中以故其學具有端緒遂推以切劘醫方宜乎其立論大與世醫■(有) 經庭乎

道純、晨夕にその中に浸灌し、故を以てその學具さに端緒有り。遂に推して以て醫方に切劘(きりひらく)す。宜なるかなその立論ありて、大いに世醫と經庭■(有)るは。

6 世醫謂醫事自有心得非関于書乃或(或)讀書求之輒近而足矣不用追古人既注之迹而道純乃謂鑿

世醫は、醫事自に心得(心得した知識)有りと謂ひて書に関わるを非る。乃ち或は讀書して之を輒近(このごろの書)に求めて足るも、古人既往の迹を追るを用いず。而るに道純乃ち謂へらく、鑿

7 之妙處(處)必自讀書中得来亦必自古書中得来如素問之陰陽結斜斜字前人難其解道純謂斜當糾

の妙は必ず自ら讀書中に處し得(強い肯定の気持ちを表す助詞)来(希望・命令を表す文末助詞)。亦た必ず自ら古書中たり得来。

『素問』、陰陽結斜の斜字の如く、前人其の解に難ずるも、道純は謂ふ、斜は當に糾

8 字訛引説文糾瓜瓠結_レ以為證云結糾即結_レ其於七損八益引玉房秘訣謂其言與王注付洵為古

字の訛なるべし。説文「糾、瓜瓠結_レ」を引き證と為して云ふ、「結糾」は即ち「結_レ」なりと^{※1}。

其れ七損八益には玉房秘訣を引きて謂ひ、其の言と王注と付す。洵^{※2}に古

9 来相傳之説靈樞之不精則不正當人言亦人人異道純謂正當連文援華佗為證識者服其明確其

来相傳の説^{※3}為り。

『靈樞』の「精ならざれば則ち人に正當ならず」の言も亦た人人に異なれり。道純、「正當」は連文なりと謂ひて、華佗を援^{※4}きて證と為す^{※5}。

識者、其の明確なるに服すべし。其の

10 醫方之傳得之伊澤蘭軒而復受治痘之訣於池田京水然亦未敢輕為人施治每謂徵古善本校古

醫方の傳は、之を伊澤蘭軒に得、復た治痘の訣は池田京水^{※6}於り受く。然るに亦た、未だ敢て人の為に軽々に治を施さず。毎に謂ふは、古善本を^{※7}徵し、古醫經を校し、

11 醫經以味古醫道吾事畢矣何必屑屑焉與世鬪爭長乎故友丹波君莒庭嘗歎迷庵掖齋之歿也（三十年） 罕

以て古醫道を味はへば吾が事畢はれり、何ぞ必ずしも屑屑せつせつ焉として世鬪と長を争はむか、と。故友丹波君莒庭、嘗つねに、迷庵掖齋の没すること也（三十年）、

12 能鑒別古本者唯道純及森立之獨能得其真傳乃相與謀使其撰經籍訪古志余亦嘗寓目其間為

能く古本を鑒別せる者は罕まれなり、唯だ道純及び森立之のみ、獨り能くその真傳を得たり、と歎く。乃ち相ひ與に謀りて其の經籍訪古志を撰ば使む。余、亦た嘗て其の間に寓目して之に序例を為る。

13 之序例學者傳錄稱為不可少之種意者道純之力居多焉家多儲古本一莫不精善所藏各書一莫

學者、傳錄し、稱して少く可からざるの種と為すべし。意者道純そのの力、居多（大部分を占める）なり。家に多く古本を儲たくわえ、一つとして精善ならざる莫く、藏せる所の各書、一つとして

14 不經點校學者欲考古者必借觀取正性沉默寡言遂視如不見其所長迨其為人有所辨證各獲其

點校を経ざるは莫し。學者にして古を考えむと欲する者は、必ず借觀（借鑑・他人の言動を自己の戒めとする）して正しきを取るべし。性は

沉默寡言にして、遽ついでに視るもその長ずる所を見さざるが如くあれど、其の人と為りに迫おとれば辨證（分析して証明する）する所有り、各々其の

15 益始服其精博云弘化甲辰

益を獲て始めて其の精博に服すと云ふ。弘化甲辰、

16 官命講鑿經於躋壽館歳有賞賜嘉永巳酉始奉

官命ありて鑿經を躋壽館に講じ、歳々に賞賜有り。嘉永巳酉、始めて朝見を奉ず。

17 朝見既又例賜廩米凡館中分（分）校各書必經道純再勘然後為之所著有素問識小靈樞講義及雜錄

既に又た廩米を例賜さる。

凡そ館中分校（手分けして校正すること）の各書、必ず道純の再勘を経て然る後、定めと為す。著す所は『素問識小』『靈樞講義』、及び雜錄

18 若干卷皆藏于家道純諱全善號抽齋道純其字也祖曰本皓考曰久（允）成世為弘前侍醫妣岩田氏其

若干卷有り、皆家に藏す。

道純、諱は全善、抽齋と號す、道純は其の字也。祖（祖父）は本皓と曰ひ、考（死んだ父）は允成と曰ふ。世々弘前の侍醫為り。妣（死ん

だ母親）は岩田氏（岩田縫）。其の

19 生在文化乙丑十一月八日以安政戊午八月廿九日病没得年五十有四葬于江戸谷中感應寺有

生れは文化乙丑十一月八日に在り、以て安政戊午八月廿九日病没す。年五十有四を得、江戸谷中感應寺に葬らる。

20 三子長恒善尾島氏出先■（卒）次優善岡西氏出出為矢島氏後三成善山内氏出継一女平野氏出三

三子有りて、長は恒善、尾島氏に出で（尾島氏定から生まれて）、先に■（卒）す。次は優善、岡西氏（岡西氏徳）に出で、出でて（澁江氏を出て）矢島氏の後（跡取り）と為る。三は成善（実際には七男にあたる）、山内氏に出ず（山内氏五百）。継ぐ（澁江氏を継ぐ）。一女（長女純、この他にも早世した者も含めて五人の女がいた）、平野氏に出づ（平野氏威能）。三

21 子皆託余受學越己未將勒石墓道而属文於余嗚呼吾所親交如小島寶素君丹波菫庭曉湖二君

子皆な余に託され學を受く。越に己未、將に石墓を勒らんとし、道ふるに余に文を属す。

嗚呼、吾が親交する所、小島寶素君、丹波菫庭、曉湖（元胤の子・元昕）の二君、

22 及掘川舟庵數年之間皆相繼歸道山今復遇道純之奄歿執筆以志墓石能無既焉三歎矣乎遂節

及び掘川舟庵の如きは、數年の間に、皆な相繼いで道山（仙人の住む山）に歸る。今復た道純の奄（い）に歿するに遇ひ、筆を執り以て墓石に志す。
能（あ）に既焉（慨焉・なげく）三歎せざらんか。遂に

23 録其生平併為之銘銘曰

其の生平（平生、一生）を節録（要点のみの記録）し、併せて之の銘を為る。銘に曰く、

24 以醫家而治醫書 與儒者治經一致 唯是古者之足徵 何問今人之有異 嗟矣乎

醫家を以て醫書を治むるは、儒者の經を治むると一致す。唯だ是れのみ古者を徵（あ）すに足る、何をか問はむ今人に異有るを。嗟（あ）矣（あ）乎。

25 斯人而亡 此理也其誰與議

斯（し）の人（わ）而も亡く 此の理、其れ誰と與（と）に議らむ。

萬延紀元歲次上章涪灘八月廿九日建

廣羣鶴刻字

萬延紀元（一八六〇年）、歲次（年まわり、あるいは歲星セウセイ||木星モクセイの次）は、上章（火の兄の異名）、涪灘（太歳が申にある年）、八月廿九日建つ 廣羣鶴刻字す。